

ドストエフスキー論

——混沌と矛盾の世界——

沼上真理子

卒業論文に於いては、ドストエフスキーの『悪霊』『白痴』『カラマゾフの兄弟』の三作品を取り上げ、『翻訳小説としてのドフトエフスキー研究』——混沌と矛盾の世界——という論題で考察した。本論考では特にその中の『悪霊』のスタヴローギンを中心として考察した部分を掲げる。

第一章 みみずくの虚無

『悪霊』に於けるニコライ・フセーヴォロドヴィッチ・スタヴローギンほどドストエフスキーの作中人物の中で謎に包まれた人物はいない。彼の姿は霧の中にある。しかし、決して遠い存在ではない。

「スタヴローギンの告白」の章で、チーホンが読む黙示録の意味は重要であろう。

「ラオデギヤにある教会の使いに書きおくれ。（中略）われな
んじの行為を知る、なんじは冷かにもあらず熱きにもあらず、

われはむしろなんじが冷かならんか、熱からんかを願う、かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、ただ微温きが故に、われな
んじをわが口より吐き出さん。」

これをあてはめてみるなら、スタヴローギンは冷かな人、そして熱き人とはチーホンになるであろう。この二人が顔をあわせる「スタヴローギンの告白」の章は、『悪霊』の中で重要な位置を占め、当初掲載を拒否されたとしても、この作品に於いては不可欠である。この章を中心としてスタヴローギンとチーホンを見てみよう。

スタヴローギンに就いての最初の記述の中で、スチュバン・トロフィーモヴィッチとの関係から、「あの永遠に絶えることのない神聖な憂愁の最初の感覚を呼びさますことに成功したのである。ある種の選ばれた魂の持主は、いったんこの憂愁感を味わい身をもって体験したら最後、その後はもはや絶対に安価な満足と交換しようとはしないものなのである」とスタヴローギンについて説明し、彼を「選ばれた魂の持ち主」として扱っている。彼は憂愁を味わい、

人間の本性・人間存在の意味を求めてヨーロッパを放浪した。然しそれによって彼は自己を完成する事が出来たであらうか。彼が成人して故郷に帰って来た時の描写に、「その明かるく澄んだ目はなんだかあまりにも落ち着きはらって、影がなさすぎる（中略）彼の顔は仮面を思わせる」、とあるのに対して、旅行から再び戻ってきた時の彼は、「彼の顔は仮面を思わせるなどは、いまではもはや絶対に言うことはできなかった。」とあり、スタヴローギンは仮面を取り去った。しかし、何故彼は仮面をとり、そして仮面の下スタヴローギンとは一体、何者なのか。彼が人間として成熟し、自身自身を見極める人物となりえたので仮面がとれたとも思える。しかし、彼を満足させる物は安価な物であるはずがないのであるから、それをすぐ手に入れることは可能であらうか。逆説的に考えると、完成されたと思われた本性は実は破壊なのではないかという仮定も成り立つ。事実びこのマリーヤはスタヴローギンに「わたしの大好きな人はすばらしい鷹で、おまけに公爵なんだよ。ところがお前なんか汚らわしいみみずくで、たかが使い走りの店員じゃないか」（傍点沼上以下同じ）、と彼を追い出す。マリーヤ・チモフエーイエヴァは狂人ではあるけれども、彼女は大地を聖母マリアを知っている女性として描かれている。その彼女がスタヴローギンにむかって「みみずく」と叫ぶのは、彼女が彼を見抜いたからである。ではスタヴローギンの見抜かれた内実とは何か。

「スタヴローギンの告白」中、彼は彼のために罪もないのに母から殴られをマトリョーシヤを見て、

「私はいままでの生涯でそんな立場に置かれることがあると、きわめて不名誉な、はかりしれぬほど屈辱的で、卑屈な、そして

爾なよりもまず、滑稽な立場が、私の心の中に必ず無限の怒りとともに、なんとも言えない快感を呼び起こすのが例になつていた。（中略）自分が下劣な人間であることを意識し」

と書いている。この文章から見ると、彼は内面深く、彼を客観的にみるもう一人の彼を持ち、そのもう一人の彼がスタヴローギンを見下ろして、自分自身の卑劣をしっかりと意識し、自分に、お前は卑劣な人間、墮落した人間だと言ひ聞かせ、その痛みにたまらない快感を感じていたのであろう。それはスタヴローギンがチーホンに「彼はいま、ことに夜など、一種の幻覚に悩まされて、どうかすると自分のそばになにか意地の悪い、嘲笑的な、しかもへちやんと理性を持った」存在がいるような気がしたり」、と話す存在である。

この「理性を持った存在」が、彼の中のもう一人のスタヴローギン、彼がダーシヤに「ぼくの悪魔がなんだ！」と言う彼の小悪魔なのである。しかし彼の「みみずく」の内実はそのだけではない。理性イコール悪魔ではなく、理性が、あらゆる物を服従しようとする理性を持った存在が、ついに理性に転化・屈服させる事の出来なかつた美意識・憂愁感といった物に負けてしまう事なのではないだろうか。森有正氏はスタヴローギンの破壊について人間の情欲や思索という物が「むしろそれらの人間の作用に常に働く精神的意味的方向性が歪曲され転倒されているからにはかならない」と述べている。森有正氏の説を全面的に肯定するのではないが、彼の力が「歪曲され転倒された」のは事実だ。スタヴローギンは理性を持っていて、神に匹敵する程の高みにまで—安価な満足ではない—自己を押しあげようと努力したのであろう。だが、理性で打ち勝つ事のできない非理性的な存在の前に理性は屈折される。この限界、仮面

の下の自己の虚無の地獄を充分に認識しないで頭をぶつけ、その力がそのまま彼自身の内部に暴力として跳ね返り、彼を滅ぼす物になつたのである。スタヴローギンはそれに気づかない。彼の言葉には「理性」という語がしばしば出てくる。彼は自分の理性の力を信じすぎ、それに裏切られていることに気づかない。自然によつて過大な能力を与えられすぎた超人であるはずのスタヴローギン、彼がただひとつ無意識に信じた「理性」のためにちっぽけな「みみずく」となり、びっこのマリーヤに見抜かれてしまう。

彼の理性を破壊する象徴としてマトリョーシャが存在する。スタヴローギンは彼女を犯し、自殺を見詰める。その自殺の寸前に彼女はスタヴローギンにむかつて「彼女の顔には、こんな小さな子供には決して見られないような、深い絶望の表情が浮かんでいた。彼女は相変わらず私を威嚇するように小さな拳骨を振り上げては、非難の色をこめて顎をしゃくりつつけるのだった。」と抗議するような仕草をみせる。それに対しスタヴローギンも「そのうちに立ち上がつて、絶望にかられてひどい思いに片をつけてしまうために、彼女を殺してしまつたかもしれないのだ。」とあり、さすがの彼も深い絶望と恐怖の念を抱くに至る。

マトリョーシャの描写には「顔立ちは平凡であったが、「その顔には」実になんとも言えないほどあどけない、しかも安らかな、きわめて安らかな感じがみちあふれていた。」とある。この「安らかな感じ」を「深い絶望」に、「神様を悲しませてしまつた。」と言わせたのがスタヴローギンである。彼は尤も墮落した人間に、つまり聖書の中にある「この小さき者のひとりをつまずかす者」になつてしまつたのだ。これは、一見理性を持った冷たい小悪魔の勝利の

ように見える。彼はマトリョーシャの死によつて、彼の「憂愁の感覺」を持つ存在を否定し、理性の存在が優位を占める。だが、それはマトリョーシャの絶望という壁によつて打ち碎かれる。スタヴローギンはマトリョーシャの死後、「自分は善悪の区別を知りもしなければ、感じてもない、そしてそうした感覺を失つてしまつたばかりではなく、もともと善悪の区別などはありません（中略）あるのはただ偏見だけである（中略）この自由を手に入れたら最後、自分の身は破壊であるというわけだつた。」と自分を定義している。

彼は自由になつたら破壊だと言う。勿論、自由の中には自由の重荷と空白があり、その中で自己決定をなさなければならぬ。その仮面をとつた個体としての自己決定が彼を破壊に追いやる。それでも彼は救いを求めて放浪し、地上の楽園的な夢を見て再生するかのよりに思えた。けれども、そのあとで顎をしゃくり、拳骨を振りあげている絶望しきつたマトリョーシャの姿をみ、どうにもやりきれない思いに苦しむ。ここで彼がこの絶望と苦惱に正面からむかえば、その壁を乗り越える事が可能であつたらう。しかしスタヴローギンは、「いまでもその気になれば、マトリョーシャのことなどは遠ざけられるはずである。それは私にもわかつている。私は前と同じように、完全に自分の意志を支配しているのである。（中略）私は決してそうしようと思わないのだ。」と自分の力を断定している。スタヴローギンが自分の意志を支配する力というのは彼の理性の力ではなく、その変形、絶望という壁にぶつかつた理性の屈折された力、感情を麻痺させる事なのではないだろうか。感情を麻痺させれば苦痛もなくなるからだ。チーホンにはそれがよくわかつている。彼はスタヴローギンにご自分の誇りや、あなたの心の中に住んでい

る悪霊などには、睡でも吐きかけておやりなさい！ そうすれば結局あなたは勝利者となり」と忠告している。

マリーヤと同様にスタヴローギンを理解するのがチーホンである。彼が実際に姿を表すのは、「スタヴローギンの告白」の章だけであるけれども、彼とスタヴローギンの関係は前述した熱き人と冷かな人だけの関係であらうか。勿論、チーホンは熱い信仰の持ち主、キリスト者として描かれており、『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老を思い起こさせる所があり、また「白痴」のムイシキンとも熱きキリスト者という点で似ている。また、このムイシキン公爵とスタヴローギンはある意味で類似している。例えば、二人ともロシア人でありながらロシアにあまり縁がなく、ロシアから外国へ、再びロシアに戻ってきながら、まもなく一方は白痴となってスイスへ、もう一人はスイスへ行こうとしてその直前に自殺してしまう。名前も、レフ・ニコラエヴィチ・ムイシキンと、ニコライ・フセーヴォド・ドイッチ・スタヴローギンで、ニコライの名を（ムイシキンは父姓で）共有している。この二人の類似はチーホンとスタヴローギンに於いてもまた同様である。スタヴローギンはチーホンの前に、冷たい無神論者として存在している。しかしチーホンは人間の暗黒の部分を持たない者ではない。チーホンは我々が一般的に想像する様な完璧な聖人として描かれているのではない。彼の性格のアシパランスは「チーホンの庵室になっているふたつの部屋の飾りつけも、やはりなんとなく奇妙なものだった。」とある通り、部屋からも窺われる。さらにスタヴローギンが彼に、「僕はあなたが大好きですよ」と言った自分自身の言葉から腹を立てないようにとチーホンは言っている。それに対し作者はスタヴローギンに「僕が必ず

腹を立てるに相違ないなんて、なんだってそんな的を射た想像をしたんですか！（中略）しかしあなたは実に無礼な皮肉屋だ、人間の本性について実に屈辱的な考え方をしているんですからね。」と言わせている。この様に読み進むにつれて、チーホンは聖人と言うよりも、スタヴローギンと同じ小悪魔を持つ醜悪な人間としての部分を持ち、作者はそれを誇示しているとも言えるのではないだろうか。森有正氏はチーホンについて、

「チーホンの道はこの水平線を切断する垂直線、人間としての否定の道をもさらに否定する恥の道、十字架の道であった。（中略）裸形の存在そのものを挙げて他の意志に委ねることである。^{（注2）}と述べている。一面では、確かに彼は「恥の道」をいく者だ。では、彼がスタヴローギンの新しい犯罪を見抜くのは何故か。この見抜き方はゾシマ長老がドミトリーの近い将来の罪を見抜くのと酷似している。一体、チーホンは暗闇なのか、それとも光明なのか、スタヴローギンは彼の目を見て、

「それが実にしっかりとした、はっきりとした意志にみちあふれた、しかもそれと同時に、実に思いがけない、謎のような表情をたたえた目つきだった（中略）チーホンは自分がなにをしに来たのかももう知ってるのだ、すでにその予告を受けているのだ」と感じる。これもまたチーホンの聖性を証明する描写である。彼は人間の恥ずかしい、暗い部分と人に尊敬の念を抱かせる部分を、同時に持っているのではないだろうか。聖なる崇高な存在とは二つのコントラスト、岸を同時に持つ物、それを示す物なのである。チーホンはスタヴローギンと同様に、傷を不信の傷を持ちながらもそれを越える力を持っていた。「スタヴローギンの告白」の章の中では

スタヴローギンもまた、再生できる可能性を見ていたけれども、リーザとの一夜を不毛にし自殺してしまう。自殺する直前のダーリヤ・パーヴロワナの手紙の中に「私はいたるところで私の力をためてみた」とあり、その力に対して、「しかしなんのためにこの力を使つたらいいのかそれだけはどうしてもわからなかった」と述懐し、さらに、こう書いている。

「私は知っている。私などは自殺してしまえばいいのだ（中略）それがむしる欺瞞であることを私は知っている——無限につづく欺瞞の列の最後の欺瞞なのである。寛大ぶつて見せるためだけに、自分を欺いてなんの利益があるというのだ！ 忿懣と羞恥心は私の内部には絶対に存在し得ない。したがって、絶望もないわけだ。」彼の理性の屈折された暴力は彼自身をすたすたに破壊してしまひ、「絶望もない」と言わせるまでになつた。彼はマトリョーシヤの苦悩と絶望からのチーホンをも凌ぐ熱い信者にもなりえたはずであり、作者もそれを望んでいなかったとは言えない。だがスタヴローギンを自殺させたのは単に「小さき者のひとりをつまずかす者」として罰を加えたというのではない。ドフトエフスキーは自分を崇高な存在にしたいと願つても理性の屈折された暴力により、愛する力・信する力・人間としての感情を持ちえなくなった現代の何者でもない、エゴまでも消えてゆく人間を避けることができなかつたのではないだろうか。

第二章 ソドムの天使

『白痴』、『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』の三つの作品とも殺人が行われている。殺人という人間の破壊行為は、混沌の世界の中

に、さらに暗さと血腥さを与えている。ドストエフスキーは、混沌・矛盾そして破壊といった人間の中の最も暗黒であり、目を背けたくなる部分を何のために書き続け、そしてそれに執着しているのだろうか。作者は『地下生活者の手記』の中でこう述べている。

「苦悩は疑惑であり、否定である以上、疑うことが許されたら、そんなものは水晶宮などと言えたものではあるまい？ それともかくとして、人間は眞の苦悩、つまり破壊と混沌を決して拒むものではないと、私は信じて疑わない。苦悩——これこそ眞に意識の唯一の原因なのである。」

この文章の中で、作者は破壊と混沌を人間の眞の苦悩と規定し、それを肯定している。確かに、ドストエフスキーの作品に登場してくる主要人物の中には苦悩を求めている人々が少なくない。スタヴローギン、ナスターシャ、ロゴージン、イワンさらにドミトリーといった人々の生きる上で苦悩の存在は大きい。これらの人々にとって、一体、苦悩とは何であらうか。スタヴローギンを中心として彼等の苦悩を見てゆこう。

スタヴローギンについては第一章の中で、「理性」を軸として彼の本質に近付いたつもりであり、だがそれにしても彼は何という人物なのであろうか。彼の顔は「その髪の毛はなんだかあまりにも黒々としているし、その明かるく澄んだ目はなんだかあまりにも落ち着きはらつて、影がなさすぎる。顔色はなんとなくひどくデリケートで、あまりにも白すぎるし」と描写されている。彼の顔を描写した文章の中には、「あまりにも」、「ひどく」と言った訳が多く出てくる。彼の顔の美しさは、この「あまりにも」に象徴される異様な雰囲気と覆われているし、またその異様さの為にさらに美しさを

増す。異様という事一人間でありながら人間を感じさせないということ―は、日常の限界の外にあるという点で、さらに「仮面」という自己と他者とを区別する非連続性を問題にしている彼の顔は非連続性の消失を意味するエロスに繋がる。

ドストエフスキの文章の中では時間に関する描写が詳細であるけれども、特に「スタヴローギンの告白」の章の中で、時間は執拗なまでに書かれている。例えば、「一分ほどしてから私は時計を見て、できるだけ正確に時刻を頭に刻み込んだ。」「彼女が出て行ってから、ちょうど二十分、(中略)かっきり十五分だけ待ってみる(中略)時間までにはまだ三分あった。」等スタヴローギンが、自分の意識の確をさ示かすつもりで提示した時間までも、彼の異様さ、度をすごした力を誇張するだけになっている。この彼の異様なイメージと、彼の部屋のような重苦しさは、理性が壁にぶつかって跳ね返った力によって破壊されてゆく心の空虚さからくるが、その空虚さの中で、彼をさらに異常に、重苦しく変態じみた者にすることが苦悩である。

スタヴローギンはシャートフに殴られた時彼はなにも言わなかった。じっとシャートフを見つめていたが、その顔はまるでシャツのように蒼白だった。」とある。彼の痛みは殴られた痛みだけではない。怒りを押さえる事こそ彼の痛みなのである。だが、何故彼はそうした精神的な苦痛を耐えなければならぬのか。シャートフに対して良心的な負い目があるからなのか。いや、最初に目を伏せたのはスタヴローギンではなく、シャートフの方であった。

ガガーノフとの決闘のあとで、スタヴローギンはキリーロフに「誰にも背負いきれないような重荷を、どうして僕だけに背負って

くれと言うんだろう？」と尋ね、キリーロフから「僕は、あなたが自分から重荷を求めているんだと思ってましたよ。」と切り返さされている。確かに、スタヴローギンは重荷を求めている。この重荷は彼にとつて、苦悩・苦痛と同じ意味を持っている。キリーロフはさらに続けて、スタヴローギンの重荷が重いのは生まれつきのもので、指摘している。けれども彼は重荷の中にある安らぎを見出しており、それは彼に残された唯一のもの、人間としての本能の中の情欲を満たすものなのである。

スタヴローギンの放蕩の初期の頃の情欲は憂愁という特権を持った人間の美に対する渴望であつたらう。彼は薄暗い路地裏に、最初は恐怖と抵抗があつたであらう。そしてそれと同時に理由もなく魅力を感じたのではないだろうか。路地裏の息苦しさ、濁ったような空気のことで自分はこうした場所が似合っているのだという墮落感とそこにいる自分という美意識と安心感。そうした中で、彼は自分へ自分へと彼の意識を集中させ、自分を痛めつける事に悦びを見出していったのではないだろうか。

しかし、その陰気な町でのスタヴローギンには、まだ肉体が存在していた。故郷に帰ってきてからも、ガガーノフの鼻を摘んで引きずりまわした時、イワン・オシポヴィッチの耳を噛んだ時も肉体的な情欲を感じたであらう。彼にはまだ「仮面」が存在していたのであるから。だが、マトリョーシヤの死によってからは彼女の絶望を避けるために苦悩ばかりを追い求めるようになったのである。

スタヴローギンは、墮落の中に、この選ばれた魂の持ち主であるはずのスタヴローギンが墮落した事に対する罪を考えるようになった。だが罪を知るといふことは神の問題、宗教的土台による善悪の

認識を明確にすることによって初めて理解できる事なのである。その規定が確立できずにいるうちから、罰を求めて罪を知ろうとしたのではないだろうか。スタヴローギンの苦痛・苦惱への欲望は、罪に対する罰ではなく、その反対からの欲求なのである。そして、苦痛・苦悩は彼にとって罪を教える事なく痛めつけられる快樂だけを彼に与えることになる。もはや、苦悩は痛みというよりも、精神一魂一対する悪魔からの愛撫にほかならないのである。天使たちはソドムとゴモラの町を焼きはらい、立ち去るが、スタヴローギンは天使でありながらソドムの火の中に身を投じてしまった人物なのではないだろうか。

彼はマリーヤ・チモフエーヴナと結婚する時に、「こうした人間の屑のような女と結婚するという考えが、私の神経を刺激したのである。これ以上醜悪なことはおよそ想像もできない」と考えることから明らかであるように、醜悪な物・苦痛を与えてくれる物を目指している。それは不自然に肉体を殺してゆくことに、さらに破壊行為にまで至る。第二部の夜の章で彼はマリーヤを訪ね、眠っている彼女の顔を見つめる。

「身動きもしないで、無言のまま、突き刺すような目つきで、穴のあくほど彼女の顔を見つめていた。(中略)おそらく、その目つきに嫌悪の色、彼女が驚いたのを楽しむような意地の悪い表情さえも浮かんだのかもしれない。」

マリーヤは単なる気違いではない。彼女の顔はスタヴローギンとは反対に穏やかであり、快いものである。彼女の中にある真心と喜びの色は、スタヴローギンにとっては嫌悪であり、彼を圧迫する。彼はマリーヤを憎み、捕えられ自由を失った物をいたぶるような目

で眺め、その事に陰気な快感を見出している。彼は苦悩に身を委ね、その快感と共に苦悩でない物、喜びの中にある存在に憎悪を感じ、それを破壊しようとするようになっていく。彼の中に巣くったデモーニッシュな快感は、彼を手中に納めただけでは満足せず、スタヴローギンの周囲の人々を破壊の中へ巻き込んでゆく。彼はフエージカに金を渡し、その事をダーシヤに告げながらも尋ねる。「へいから聞いてくれー」と毒々しい、いびつな微笑を浮かべて、彼はそのうしろ姿に呼びかけた。へもしもだね：つまりその、ひと口に言えば(中略)店へ出かけて行ったあとでも君は来てくれるかね？」とスタヴローギンは彼の救いの天使に対してもデモーニッシュな種を蒔かずにはいられない。

スタヴローギンの苦悩の渦の中に飲み込まれてゆく女性には、もう一人、リーザが存在する。スタヴローギンはリーザに対して、「私がかつて、初期のころだけに経験したような、あれと同じ狂暴な衝動をともなう情欲の発作を感じた。私は新しい犯罪に対する恐ろしい誘惑」を感じているのを告白している。リーザはスタヴローギンにとって、自己生存の最後の証明、マトリョーシヤの絶望から一時でも逃れ、自分を卑しめて快感を得るための対象物なのである。だが、スタヴローギンには初期の放蕩の時と同じような肉体・仮面はもはや存在しなかった。いや、肉体ばかりではなく精神的な快感も同様に、それを追い求めるうちにより強力な力でなければ感じられなくなっている。魂への悪魔からの愛撫は魂そのものを破壊し虚無の闇に突き落とす。リーザとの不毛の一夜のあとで、彼は「僕をいじめてくれ、僕を罰してくれ(中略)君を破壊させてしまったことも、僕はちゃんと知っていた。そうだへ僕は自分のため

にその瞬間を留保したのだ」と叫ぶ。彼は謎の人物、苦痛から快樂を見出ししている恐ろしい人物ではなくっている。リーザに「あなたの心のなかには、なにか恐ろしい、汚らわしい、そして妙に血なまぐさいものが(中略)おそろしく滑稽に見せるものがかくされている」と言わせている。リーザの言うとおり彼は「滑稽」な人物に成り下がってしまったている。マトリーシャの絶望の前に歪められた理性、苦痛に対する快樂への欲望によって麻痺され破壊されてゆく感情。スタヴローギン存在の全体性の中で、精神—魂—と肉体は今分裂の危機に瀕している。ここに於いても、二つのコントラスト、二つの自我の矛盾がある。自分を痛めつけてサディスティックな快感を得る自我と、痛めつけられることに快感を感じるマゾヒスティックな自我のふたつであり、彼はこの二つの間で揺れ動いており、ついに存続し続ける事が不可能になって自殺してしまうのである。

第三章 苦悩の果てに

ドストエフスキーの苦悩への志向は、スタヴローギンだけではなく、『白痴』のナスターシャ・フィリップオヴナの中にも流れている。彼女の「二つの異なった趣味のなかに残忍な混合」こそが、スタヴローギンの二つの自我の間での揺れ動きに通じるのではないだろうか。彼女が読者の目の前に最初に現われたときの描写は、

「並々ならぬ美しさをもった婦人の姿が写し出されていた。

(中略) どうやら栗色と見えるその髪の毛は、あっさりとして行ききふうでなく結われていた。目は暗色で、底知れぬ深さを描え、顔は物思わしげであった。顔の表情は情熱的で、またなんとなく

尊大に構えたようなところがあつた。彼女はいくぶん痩せ気味な顔立ちで、ことによると顔色も蒼白そうであつた」

とあり、彼女もまたスタヴローギンと同様に非凡な美しさを持ち、底知れぬ目を持っている。ただ、顔色の蒼白さに象徴される情熱は彼と異質のものである。マイシキンは彼女の写真から、すでに苦悩を読みとり、イェバーンチン將軍夫人と娘達に彼女の苦悩の表れを語っている。

ナスターシャ・フィリップオヴナの苦悩はスタヴローギンの場合よりも己れを痛めつけようとする自我の方が強いと言えよう。彼女の自己卑下はそれによって快樂を得るといふよりも、それなしでは生きていけない彼女の生存の基本条件のようにさえ思われる。だが、彼女はやはり苦悩の中に慰めと安らぎを見出ししている。彼女の心の中に苦悩・苦痛からではない真の安らぎと喜びを植え付けるのは不可能なのである。マイシキンは彼女の苦悩を見定めている。

「あの女は物狂わしげにしょっちゅう、自分が悪いとは思われない、自分は世間の人たちの犠牲だ、放蕩者や悪党どもの犠牲なのだ」と叫んでいます。(中略) 口とはまわつたく反対に自分こそ：

…自分こそ悪いのだと、心の底から思い込んでいますのですよ。」

もし、彼女から自己卑下と苦悩を取りのぞいたら彼女は生きていけないだろう。彼女がロゴージンに引きつけられるのも、ロゴージンの愛が憎悪と置き換えられるほど危険な狂気じみた愛であり、彼女を無傷のままにはおかないだろうという想像からの、より一層の痛みへの渴望と、ロゴージンの女になるのだという意識からの自己卑下への願望からなのである。さらに—彼女の心は天使の優しさよりも不均衡なサディスティックに、デモニーニッシュな苦悩の方に

強く呼応すると言えよう。ロギーンは「間違ひなくおれが刃物をうしろに隠しているからこそ、あいつはおれのところに嫁に来るんだぜ!」、と彼女の奇妙な愛の渴望を理解しているし、マイシキンは「浅ましいことをしているんだという絶え間のない自覚の中には、あの女にとって、あるいは、なにか恐ろしい不自然な慰めが、ちょうど誰かに対する復讐とでもいうようなものが含まれているのかも知れません」、と彼女の苦悩の慰めと彼女自身に対する復讐を感じ取っている。

ドストエフスキー作品の暗黒と悲劇性は、スタヴローギンやナスターシャ達の苦悩の追求から生まれる。その苦悩について荻野恒一氏は苦悩への追求はマゾヒズムではないと述べ、さらに、

「マゾヒズムは、精神病理学的には、苦悩ではなく快楽を追求しているだけなのである。そしてマゾヒズムが病的であるゆえんは、マゾヒズム的快楽が通常、虚構の価値をしか志向しえないからである。これに対してロシアの苦悩は、真正の幸福を志向するもの」^(註4)

と述べているし、またウォルインスキイも、「これは典型的にロシア的・民族的特質であつて」^(註5)と書いている。真に、苦悩を追求することはロシア的であるかもしれない。だが、単にそれを「真正の幸福を志向するもの」として定義してしまうのは早計すぎないであろうか。それに、もし苦悩がロシア的であるなら、何故ロシア民族はそれを志向するのか。幸福を追求するのに不自然に自己を卑下したり、過度に苦痛を求めたりする必要があるのだろうか。ロシアの苦痛は太陽の光の下での明るさとは程遠い。苦悩・苦痛は人間の殻の中にある渇きと飢えを訴えるもう一人の個体に対する凌辱の快き

によって求められるのである。『地下生活者の手記』の中で、ドストエフスキーは、齒痛に対して、こう述べている。

この呻き声にこそ苦痛に悩む者の快楽が表現されているのだ。もしもその男がそれに快感を感じなかったら——彼はおそらく呻き声などあげなかったにちがいないのだ。

こうした快感を知った者にとって、それを手放すことは難しい。苦痛の快楽を得ようとして、その中で燃えつきて滅びるか、それとも苦痛の方で彼等を燃やすのを止めるか。二つに一つであつて、生半可な解決はありえない。スタヴローギンとナスターシャの場合、苦悩の中で滅びるのも彼等だが、苦悩——苦悩を与えるもの——もまた彼等自身であり、彼等は、苦悩の中の快楽への追求という段に足をかけてしまった以上、滅びるよりほかに道はなかったのである。

ナスターシャはロギーンに殺されるけれども、彼が殺さなくとも彼女は死ななければならなかった。ロギーンは、「ほんとにこれというものがいなくなったらきつとものとっくの昔に水に身を投げてしまったらうよ、いや實際の話だよ。いまでも身投げをしないのは、おれがきつと水よりも、もっと恐ろしいからなんだらう。」と彼女の苦痛への欲求を見極めている。

苦悩に答える人物には、さらに『カラマゾフの兄弟』のイワンがいるけれども、その前にリーザに触れてみよう。彼女は『悪霊』の中のリーザと同一人物であると言われる。確かに、『カラマゾフの兄弟』のリーザも『悪霊』のリーザも同じようにその心は病んでいる。彼女はアリーシャにその苦しみを打ち明ける。

「子供が磔刑にされて、悲しい声でうなりつつづけているまん前に坐り込んで、あたしパイナップルのコンポートを食べてやる

わ。あたしバイナップルのコンポートが大好き（中略）彼女の黄色味がかつた蒼白い顔が急にゆがんで、目がざらざらと光り出した。」

リーザはアリオシャとイワンの流れの中に投げられた小石ではあるけれども、その存在は決して小さくない。彼女の言う「バイナップルのコンポート」こそ、今まで述べてきた苦痛の快樂という物ではないだろうか。たとえ、リーザがその子供に対して涙を流し、震えようと彼女が「バイナップルのコンポート」が捨てられない。

イワンはアリオシャに「一般人の苦惱」について話すとき、特に「子供の苦惱」だけを取り上げて話す。その中にはリーザの話と同じように、トルコ人やチェルケス人の子供に対する悪虐を話し、そのあとで「話は別だけれど、トルコ人てやつはなんでも甘いものがひどく好きだそうだね」と言っている。ここで、「甘いものの話が何のために書かれ、またイワンはなぜこの種のアネグドートを集めるのだろうか。勿論、この話のあとで、「なんのために子供までが苦しまなければならないのか、どうして子供までがその苦しみによってハーモニをあがなわなければならないのか、さっぱりわけがわからないじゃないか!」、と語っており子供らの苦しみに強い怒りを感じ、「永遠のハーモニ」を拒否している。彼の心には宗教への強い不信と不満がある。だが、その心のもう一方では甘んじて苦惱と怒りを抱いたままでありたいと願っている部分があり、それは消極的な神への「反逆」であるが、またこうしたアネグドートを集めては苦しみを味わっているイワンの秘密があるのではないだろうか。この話の中で、彼はさらに子供を痛みつける人々を分析してその中に肉体的快感を見出している。だが、このイワンこそ無

防備な子供の痛みに快感を感じているのではないだろうか。

リーザそしてイワンに於いて、彼等の苦しみは「バイナップルのコンポート」を求めている自分自身との戦いの中にある。ドストエフスキーにとつて、信じたいと願う渴きの人間と、その渴きを、飢えを許せない人間との間でおこなわれる戦いが常にある。そして、その傷の中からスタヴロギン等が生まれ、彼等のデモニーッシュな呻きの中に読者は近代人として、同じ渴き飢えを持つものとして引かれ、脚溺し、だがついには、それらを忌避し、嘔吐を持って突き離さずにはいられなくなるのではないだろうか。

〈注〉

1 森有正『ドストエーフスキー覚書』（一九六七年五月三十日発行、筑摩書房）四八頁。

2 注1に同じ。但し、五六頁。

3 ナスターシャ、フィリップポヴナに見られる「残忍な混合」とは、憎悪と信じやすい素材の混合である。何故にこの正反対の物が彼女の中に同時に存在し得たのであろうか。ナスターシャはメイシキンと同様に一枚の絵を思い浮かべる。

キリストはずっと遠く地平線を眺めておられます。全宇宙のように偉大な思想はそのまま、なごしに安らかに宿り、熱いに充ちたお顔です。子供は口をつぐんで（中略）ふつと物思いに沈むことのある、あれと同じように物思わしげに、じつとキリストの顔を見詰めているのでございます。太陽は沈みかかっております……。これが私の絵でございます。

不信と狂気だけのナスターシャなら、この様な「沈みかかった太陽」の様な冥想的な、愛に満ちた絵を想像することは不可能であろう。この「沈みかかった太陽」は「カラマイゾフの兄弟」のゾシマ長老が夕日の

斜めの光線を愛するというのと同じ心、信仰の心があるのではないだろうか。彼女の不信の中には、信じたい！愛したい！と願う気持ちがかすかながら閃いている。この希求する心が「混合」をゆるしている。

4 荻野恒一『ドストエフスキー・芸術と病理』（昭和四六年二月十五日発行、金剛出版）百七九頁。

5 A・L・ウォルインスキー『美の悲劇』（大島かおり訳、一九七四年七月十五日発行、みすず書房）七五頁。

〈附記〉

本論文中の引用文は『ドストエフスキー全集』（昭和三八年一月二十日第一刷発行、小沼文彦訳、筑摩書房）に依りました。